

日本の失われた30年における考察

黒田インターナショナル

黒田 毅

これら社会の構造転換は、世界の基準における参加と既存現実における自己という現実の2分化を与えた。世界は次世代基準における社会転換を完成させたのである。

これらは株価とGDPの拡大における新たな豊かさの創造を有する。これらは未来という現実への参加であり、既存現実という過去からの転換なのである。

これらは既得権益の拡大という風習が、世界における時代変化の速さに追従できないのである。

これらコントラストは、富裕者と貧困という現実を完全に分離したのである。

これらは、時代先端性が自己創造性を要求するため、言い換えれば戦国時代と同じなのである。変化を行えないものは、去るしか無いのである。

また行政におけるそれら理解の欠如は、追従という自立の放棄を有する。

これら負のスパイラルは、日本における世界先端性からの落伍を与えたのである。これが、李鵬首相が伝えた日本は20年後存在しないという言葉の真実なのである。日本人は一人のこの言葉に耳を傾けなかったのである。

これらは市場の閉鎖性が、競争における企業体力の強さを与えず、世界における勝者たちの現実と相違するコントラストを生むのである。

しかし既存企業基盤は、政治における正しい自己プレゼンスの構築において、それら次世代基準における転換を可能とし、社会福祉という政治の合意は、新しい社会の創造を可能とできるのである。

これら社会の構造転換は、失われた30年における日本の歴史的な自己転換を静かに与えているのである。